

山口県埋蔵文化財調査報告書第94集

たかはた

— 大津郡日置町高畑遺跡発掘調査報告書 —

1986

(財) 山口県教育財団
山口県教育委員会





日置の平野と遺跡の遠景



発見されたムラのあと



たかはた

大津郡日置町高畑遺跡発掘調査報告

目次

序
例言

はじめに	1
遺跡はどこにあるか / 日置の歴史 / 調査はなぜ行われたか / 調査はどのように行われたか	
調査の結果何がわかったか	11
姿をあらわした遺跡 / 発見された遺構 / 発見された遺物	
おわりに	31

序

各種の開発によって県下各地の埋蔵文化財が消滅していく頻度は、ここ数年とくに多くなってきております。

そしてそれに伴って、県土山口を築いてきた先人達の、その永い営みを今に伝える数多くの資料が、県下各地で発掘されております。

財団法人山口県教育財団は、教育・文化の振興という立場から、山口県教育委員会と協力体制をとり、本年度から、山口県農林部の委託を受けて、圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施することといたしました。

ここに報告いたしました日置町所在の高畑遺跡の調査では、弥生時代を中心とする集落跡が発見され、その成果は当時の人々の生活や文化を知る上での貴重な資料となっております。

本書が学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

調査にあたりまして御指導・御協力をいただいた関係各位に対し、深甚なる謝意を表わします。

昭和61年2月28日

(財) 山口県教育財団

理事長 井上謙治

序

本県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しています。

こうした開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護し、合わせて開発と文化財保存との調和のとれた県土づくりを目ざして、山口県教育委員会では、関係機関と協議を重ねるとともに遺跡の保存や発掘調査を実施しているところです。

昭和60年度は、大津郡日置町大字日置中にある高畑遺跡の発掘調査を実施し、弥生時代を中心とする集落跡を発見するとともに、当時の人々の生活や文化を知るうえで数多くの貴重な資料を得ることができました。

本書は、その調査成果をまとめた記録であり、広く文化財に対する認識や理解のため、また、学術研究の資料として活用されることを願うものです。

おわりに、発掘調査の実施にあたり御協力いただいた関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

昭和61年2月28日

山口県教育委員会

教育長 高山 治

例 言

1. この報告書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が昭和60年度に実施した県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、^{おおつくんへき}大津郡日置町大字日置中字国広に所在する高畑（たかはた）遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。
2. この報告書は、発掘調査の概要を一般の方々にも理解していただけるように、写真や挿図を中心として編集を行いました。
3. 発掘調査は、山口県農林部耕地課の要請により、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センターが実施しました。
調査組織 調査主体；財団法人山口県教育財団、山口県教育委員会
事務局；財団法人山口県教育財団、山口県教育委員会、山口県埋蔵文化財センター
調査総括；吉武康昌（文化課長・センター所長）、中村徹也（センター次長）、藤本嘉和（文化課埋文係長）
調査員；中城龍彦（教育財団指導主事）、渡辺一雄（文化課文化財専門員）
4. 調査にあたり、下記の関係機関をはじめ、おおくの関係者の方々に協力や助言をいただきました。記して謝意を表します。
山口県萩土地改良事務所、日置町経済課、日置町教育委員会、日置南部土地改良区、また、調査地区の土地所有者の方々や作業員として調査に協力していただいた地元の皆様に、事業が完了し、多くの成果が得られたことをここに報告します。
5. この報告書に使用した遺跡位置図は、建設省国土地理院発行の5万分の一地形図「仙崎」「阿川」を複製したものです。
6. この報告書に使用した土色や土器の色調は Munsell 方式によりました。農林省農林水産技術会議事務局（監修）1967「新版標準土色帖」
7. 遺構配置図等に使用した遺構略号は次のとおりです。
DW；竪穴住居、B；掘立柱建物、D；溝、P；土坑
8. 出土品の整理にあたっては、山口県埋蔵文化財センター整理室の協力を得ました。
9. この報告書に使用した図面・資料の作成、写真の撮影は渡辺が行いました。
10. 本書の執筆・編集は渡辺が担当しました。

はじめに

遺跡はどこにあるか

高畑遺跡は大津郡日置町大字日置中字国広に所在する。「高畑」は国広の中のさらに細かな字名である。遺跡の推定範囲がこの「高畑」に含まれるので、この字名をもって遺跡名とした。

山口県の北西部角島から青海島にかけての海岸地方は、北浦地方とも呼ばれ、変化に富む海岸線と低い丘陵地からなる風光明媚な所である。日置町はこの北浦地方の中央部に位置し、北に日本海を望み、東と南は長門市に、西は油谷町に接している。町の北部には、日本海に面して雨乞岳や千畳敷など玄武岩や第三紀層からなる低い山地があり、町の南部は、掛淵川の形成した日置平野が広がっている。日置平野は、面積約19,000ha、北浦地方最大の平野で、標高2m以下の干拓地・5m以下の三角洲・5m～40mの谷底部・扇状地から構成されているが、遺跡はこの日置平野の南部、掛淵川が形成した扇状地の最奥部に位置している。山陰本線長門古市駅から南に約3kmの地点である。

遺跡のある一帯は大きな地形区分では扇状地にあたるが、遺跡は河岸段丘状の台地縁辺部にある。標高約60m、比高差約5mの台地上に立つと眼下に掛淵川と日置平野を望むことができる。台地に沿った低位面は伏流水となった山水が湧き出し広汎な湿地となっており、台地の背後には安山岩や流紋岩からなる山塊がせまって、農耕・狩猟・採集・漁労などの生産活動の場として最適な立地条件を満たしている。

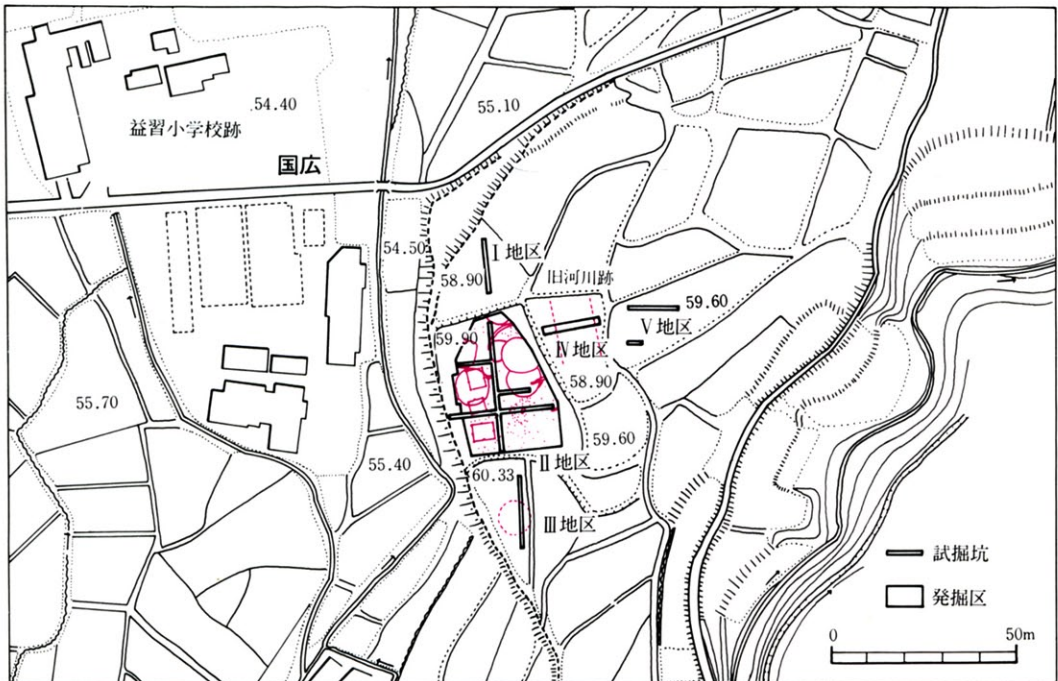
北浦地方は日本海側気候区に属しているが、沿岸を流れる対馬暖流の影響で冬は比較的暖かく、この時期卓越する北西の季節風も日本海と日置平野を隔てる山地によりさほどきびしくはない。近年の年平均気温は約16度、降水量は1,700mmで、温暖で降水量の多い気候条件となっている。



遺跡は段丘状の台地にある



台地縁辺にひろがる遺跡



周辺の地形と調査地区の位置

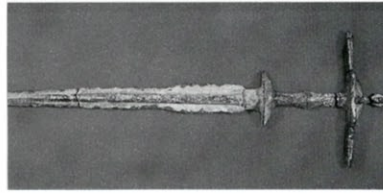
日置の歴史（先史時代～古代）

日置の人々が織りなしたその時代ごとの歴史は、日一日と変化する田園のたたずまいのなかに埋没し消え去ろうとしている。しかし、人々が生き生活をした痕跡は大地に深く刻みこまれている。今回の高畑遺跡の調査では、二千年の時を越え、人々の営みの残痕を数多く得ることができた。私達は、これらの資料を日置の歴史的景観の推移の中に位置づけはじめて、その息吹を感じることができるのである。

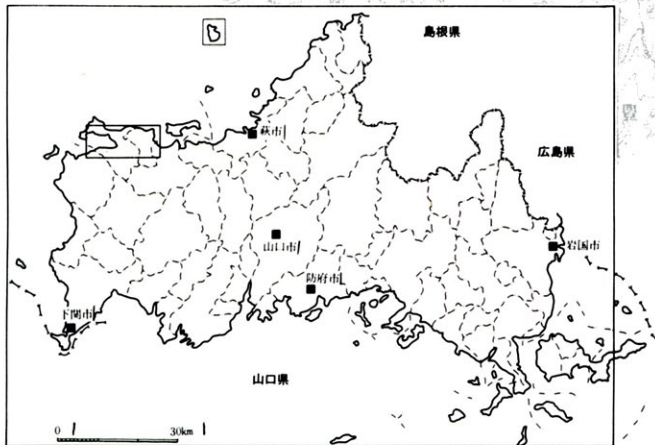
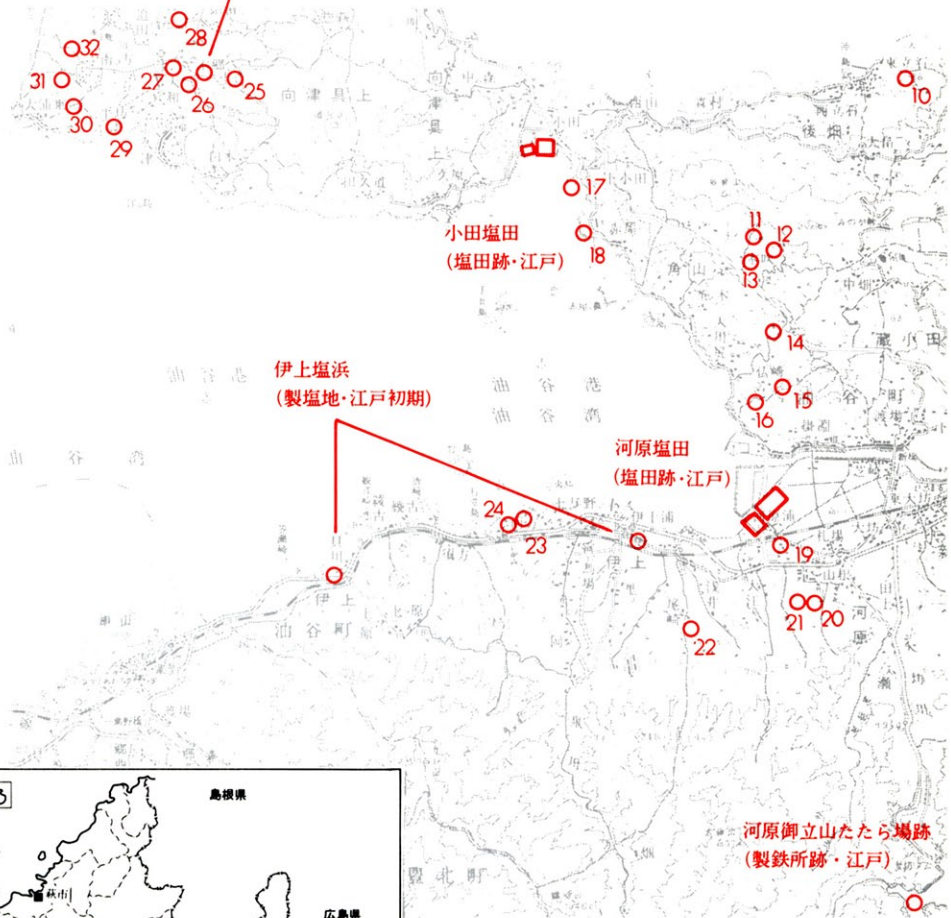
北浦地方における最古の人々の足跡は、縄文時代早期、今からおよそ1万年前にさかのぼる。日置町北部にある雨乞岳の南緩傾斜面、通称雨乞台（標高約280m）から撚糸文土器よりいともんや押型文土器おしかたもんをはじめとする縄文時代早期から前期にかけての遺物が採集されている。2万年前に頂点をむかえた最後の氷期（ヴェルム氷期）が終わると、気温は反対に上昇してやがて世界的規模の高温期（ヒブシサーマル）になった。現海面より-140m程度後退していた海は海進に転じ、縄文時代になると日置平野の谷底部の大部分にも浸入しはじめていた。雨乞台のある山塊は独立した島あるいは半島状の景観であっただろう。針葉樹の森は消え、かわって落葉広葉樹や照葉樹を主体とした森が姿を現した。雨乞台の人々は、湧水地のまわりで生活を営み、山野に分け入ってはホンシュウシカやイノシシなどを狩猟し木の実を採集して生業としていたのであろう。石鏃・石匙（スクレイパー）など狩猟具を主体にした石器群や遺物の散布状況から想像できるのである。

長い採集・狩猟・漁労の時代が終わると、大陸の米作りの文化が朝鮮半島南部を経由して北部九州にもたらされた。弥生時代の始まりである。この時代の特徴は生業の中心を米作りが占め、そのために信仰や祭りを含めて人々の生活様式が大きく変化したことである。この時代のムラは、米作りに適した低湿地を望む台地の縁辺部に営まれた。そして米作りの共同作業を采配し生産された食糧を分配するムラ長の力が大きくなって、しだいに地域の政治的統合に成功する有力者が出現するのである。

北浦弥生社会の成立は、弥生時代前期末、今からおよそ2,100年前のことである。最近油谷町大字久富字長久の扇状地扇頂部でこの時期の土期あやらぎ（綾羅木Ⅲ式）が採集されている。中期になるとムラの数が増加する。向津具半島の油谷町本郷はその中でも傑出した遺跡である。本郷は標高30～50m面積600haの盆地状の谷底平野であるが、この平野の東端宇安佐通称王屋敷から、国指定の重要文化財となっている有柄細形銅剣ゆうへいはそがたどうけんが発見されている。この銅剣は、柄と剣身を一体に鑄造したもので、朝鮮半島からの舶載品と考えられており、日本でも北部九州を中心に数例しか出土していない。したがって、この銅剣を所有した本郷のムラ長は北浦を代表する勢力であったかもしれない。また、その勢力基盤は小規模な本郷



本郷遺跡 (遺物包含地 弥生) と
有柄細形銅剣

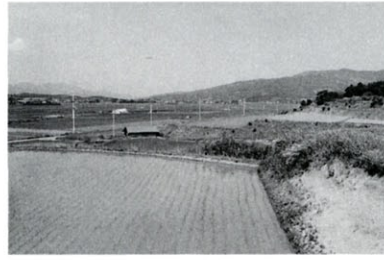


高畑遺跡の

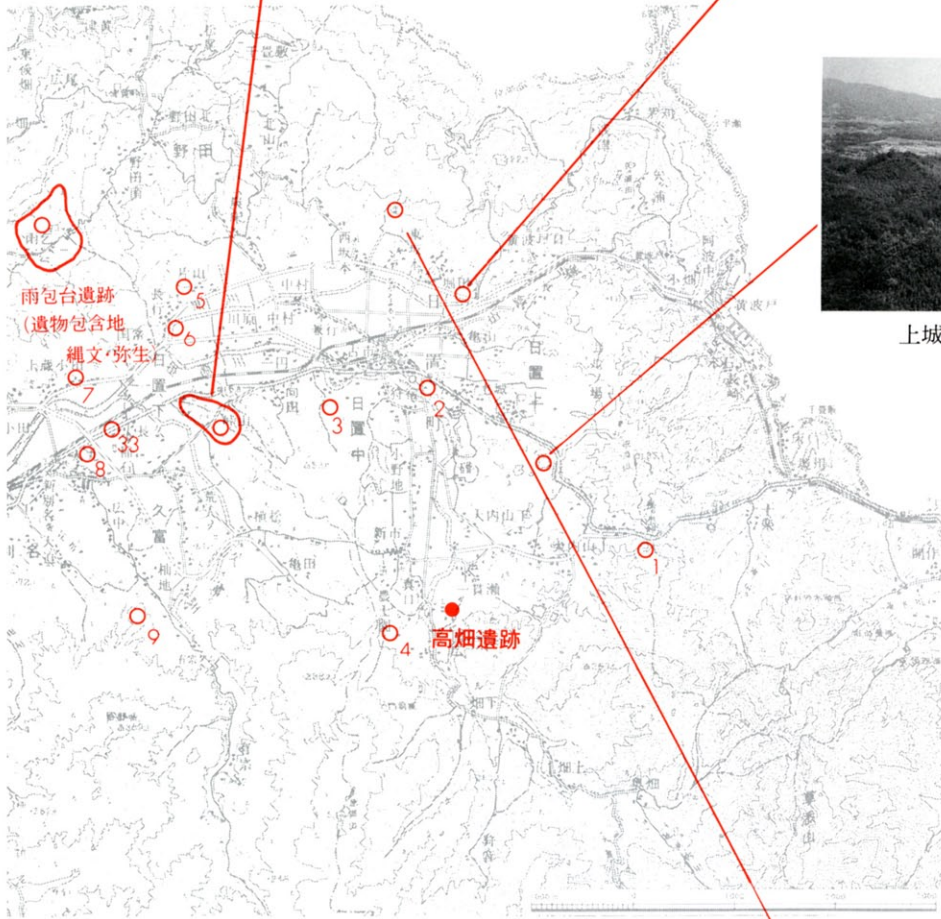
1. 椎木峠経塚 (経塚・江戸)
2. 上城遺跡 (遺物包含地・古代中世)
3. 下城跡 (山城跡・中世)
4. 赤崎窯跡 (窯跡・江戸)
5. 長行古墳 (埋葬跡・古墳)
6. 長行黒川遺跡 (遺物包含地・弥生古代)
7. 岩谷山遺跡 (寺院跡・古代)
8. 長久古墳 (埋葬跡・古墳)
9. 稲石城跡 (山城跡・中世)
10. 大神山古墳 (埋葬跡・古墳)
11. 妙法寺跡 (寺院跡・中世)



峠山古窯群 (須恵器窯跡 古代)



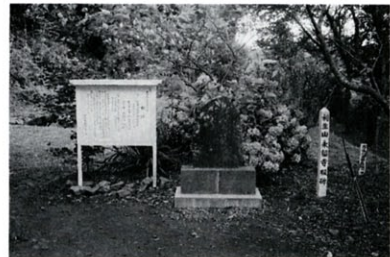
堀田遺跡 (集落跡 古代)



上城跡 (山城跡 中世)

位置と周辺の主な遺跡

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 12. 夫婦木薬師跡(寺院跡・中世) | 23. 白方古墳 (埋葬跡・古墳) |
| 13. 堀川城跡 (山城跡・中世) | 24. 前方古墳 (埋葬跡・古墳) |
| 14. 法師坊古墳 (埋葬跡・古墳) | 25. 吉祥寺古墳 (埋葬跡・古墳) |
| 15. 長田古墳 (埋葬跡・古墳) | 26. 市ノ坪遺跡 (遺物包含地) |
| 16. 仏崎古墳 (埋葬跡・古墳) | 27. 本郷亀山古墳(埋葬跡・古墳) |
| 17. 赤崎古墳 (埋葬跡・古墳) | 28. 宝珠山古墳 (埋葬跡・古墳) |
| 18. 水垂古墳 (埋葬跡・古墳) | 29. 南方経塚 (経塚) |
| 19. 十ヶ森古墳 (埋葬跡・古墳) | 30. 一軒堂古墳 (埋葬跡・古墳) |
| 20. 西門寺法洲母経塚(経塚・江戸) | 31. 南方古墳 (埋葬跡・古墳) |
| 21. 桂山経塚 (経塚・江戸) | 32. 南方北側古墳(埋葬跡・古墳) |
| 22. 浅井経塚 (経塚・江戸) | 33. 長久遺跡 (遺物包含地・弥生) |



利生山永福寺跡 (寺院跡 中世)

平野だけではなく、海上交通の拠点としての地の利を生かしたものであつただろう。日置平野における中期のムラは、前記の油谷町長久のほか日置町堀田にあり、米作りを中心とした生活が益々発展していったと思われる。また、雨乞台でも中期の遺物が発見されているが、焼畑耕作を行うムラあるいは見張り所的な特殊なムラであつた可能性が高い。このように中期は北浦の弥生社会が最も発展した時代であつた。高畑遺跡はこの頃から形成され終末期に盛期をむかえたムラの跡である。

弥生時代の人々の墓が、豊北町土井ヶ浜遺跡にみられるように、基本的には集団墓地であるのに対し、特定の階層の人々が他を圧倒する規模の墓を造り始めるようになると、この時代を古墳時代と呼んでいる。弥生時代に始まったムラからクニへの胎動は、この時代になるとより大きな地域集団の形成へと進み、さらに大和政権を中心とする国家統一の動きの中で複雑な政治状況が生まれてきたのである。しかし、庶民の暮らしは前代に引き続き米作りを主体になりたっていた。米作りの技術は鉄製農具の普及によりさらに発展し、荒地や山野の開墾が活発に進められていった。

前方後円墳のような、北浦地方の首長墓と思われる規模の墓は未だ発見されていない。しかし長門市^{すくもづか}榎塚横穴古墳から発見された馬具や金銅製^{けいとう かぶつち}圭頭・頭椎太刀は、この地に君臨した首長層の存在を示すものである。大和政権の支配が何時北浦地方に及んだかは不明な点が多いが、5～6世紀代に掛淵川中下流域の首長を中心として大和政権と統属関係を結んだものと考えられている。横穴式石室を持つ小規模な円墳は各地に点在している。向津具の本郷を中心に点在する古墳群は海との深い係わりを持つ人々の築いたものであろうし、日置平野に点在する古墳群は農民の築いた墓であろう。古墳時代の村は日置町堀田で発見されている。堀田遺跡は日置平野の北東隅にあり、弥生時代中期から形成され古墳時代末期から古代にかけて最盛期をむかえた集落の跡である。これまでに方形の竪穴住居が3軒確認され多くの遺物が発見されている。北浦地方きっての大集落であつた可能性が高い。

大和政権による古代統一政権が成立すると、北浦地方のひとつとは萩市大井を拠点とした阿武国造の支配のもと各種の部民となつて貢納物や労役を負担することになり、日置には大王家の家政に心要な物資の貢納や力役の奉仕を課せられた日置部と、須恵器の生産にあつた陶部^{すえべ}がおかれた。7世紀後半律令体制が整備されると、長門の国の地方行政機関として大津郡が設置された。「和名抄」によると大津郡にはさらに三隅・深川・稲目・向国・日置・三島・二処・神戸・駅家などの郷がおかれていたらしい。このうち日置の郷が堀田遺跡を中心とする日置平野に相当することは疑いの無いところである。掛淵川の中流域を中心に勢力を張つた日置氏は日置部^{とらみやに}を率いた伴造であり、律令時代には大津郡司^{ぐんじ}を勤めた公算の高い北浦地方第一の豪族に成長している。「日置」は「和名抄」ではヒラキと

訓じてあり、その語義や職掌については幾多の議論がある。「日置」の地名は西日本を中心として全国に点在するが、もともと日置氏は宮内省主殿寮に所属する殿部とのもりの職を世襲しており、のち官中の燈燭をつかさどる習いであったという。

古代の集落は堀田に継続して営まれている。おそらく日置氏の拠点集落であろう。遺跡の前面の水田は、今は消滅しているが、条里地割がよく残っていた。日置氏が天津郡司を勤めたとすれば、天津郡家は堀田に置かれた可能性が高い。堀田遺跡では大量の須恵器とともに、当時とすれば貴重な緑釉陶器りょくゆうとうきや瓦も出土している。また、遺物の中で特に注目されるのは、フイゴの羽口やるつぼ、それにスラグ（あるいはからみか）である。集落内で冶金関係の生産活動が行われていた証拠である。生産活動と言え、日置郷内では陶部が置かれ須恵器の生産が行われていた。日置町と油谷町の境にある峠山たおやまからはその窯跡が発見されている。峠山の古窯群は現在までに3基が発見されているが、うち2基は破壊され消滅し、残る1基が県史跡に指定されている。

律令体制の崩壊が進んだ平安時代の後半になると、日置郷には三条家の荘園である日置の庄と法金剛院の荘園である天津の庄が置かれている。またそうした荘園に挟まれるように、本来は国衙領である「保」、兼行保や一円保が存在し土地の所有関係が益々複雑になっていった。こうして日置地方にも中世的世界が到来したのである。

4～5ページに掲載した地図は高畑遺跡の位置と代表的な遺跡を示したものである。中世以降の歴史については説明を省いたが、とくに日置町における代表的遺跡である二ヶ所の中世遺跡について簡単に説明を加えておきたい。

利生山永福寺跡（大字日置上字坂本）；江戸時代の記録「寺社由来」や「防長風土注進案」によると、長徳3年（997）に建立されたと言う真言宗の寺院である。盛時には六坊を擁したと伝えられるが、跡地には現在一字の小堂が建てられているのみである。境内には寛喜元年（1229）の銘がある板碑が残されており、また同所から発見された経塚出土の銅製経筒には寛治7年（1093）雀部重吉銘が刻まれている。この寺院は平安時代から鎌倉時代にかけて日置地方の仏教文化の中心として繁栄したのである。

上城城跡（大字日置上字上城）；築城の時期は不明であるが、またの名を錦ノ城とも言い、長門守護佐々木氏の外戚の居城と伝えられる。昭和56年度に日置町教育委員会が行った調査では、上城山頂上部から掘立柱建物が発見されている。しかし居館の主体部は北西斜面に認められる段床上にあったと考えられる。

- （参考文献）日置町史編纂委員会 1983.3 『日置町史』日置町
長門市史編集委員会 1981.12 『長門市史歴史編』長門市
山口県企画部 1977.3 『都道府県土地分類基本調査、阿川・仙崎』山口県

調査はなぜ行われたか

山口県では、農業基盤の整備をめざし、各地で圃場整備事業を推進している。圃場整備事業は、大小様々な田圃の区画を一定の面積に造り変え、その周囲に溝や道路を整備することによって、農作業の機械化を容易にし、ひいては農業の経営規模を拡大し生産性を高めることを目標としている。日本で米作りが始まって二千数百年、人々は沼地や荒地を開墾して田圃を築き、そして営々とした農業の営みを続けてきたのである。特に古代律令時代には田圃の面積を1町とした耕地の整備が全国的規模で進められた。これを条里制と言う。圃場整備事業はまさに現代の条里制と言っても過言ではない。

この現代の条里制は、大型の機械を使った大規模工事を伴い、そのためにこれまで残されてきた先祖の文化的遺産、特に埋蔵文化財や歴史的景観の保存に影響を与える場合が多い。山口県教育委員会では、圃場整備事業地区の文化財を保護するため、あらかじめ遺跡の分布調査を実施し、周知された遺跡については現状保存を前提に農林部耕地課と協議を行っている。そして、このうち現状保存の困難な遺跡についてはやむなく事前の発掘調査を実施し、詳細な記録を作成することになっている。

日置町における圃場整備事業は、全町750町歩の田圃を対象に、昭和46年度から開始されているが、町中央部の280町歩についてはすでに完成し、事業の主体は日置南部地区に移っている。この地区での遺跡分布調査は昭和58年度から実施しているが、高畑遺跡はこの調査で発見された。すなわち昭和59年度の調査において、日置町大字国広字高畑の田圃の中から、弥生土器を伴う住居の跡が発見され、弥生時代のムラ跡の存在が明らかになったのである。この遺跡の保存についてはさっそく耕地課と協議を行ったが、遺跡が台地上にあるので工事の工程上現状保存は困難との結論に達し、工事施行に先きだって発掘調査を実施することにした。

調査はどのように行われたか

5月21日、日置南部地区の圃場整備事業を担当する関係部局と日置町役場に集まり、発掘調査の進め方について念入りな打ち合せを行った。

6月3日、発掘調査の開始、発掘器材の搬入を行う。

6月4日、遺跡の広がり把握し発掘区を設定するための試掘調査を開始。試掘坑は、昭和59年度に遺構を発見した地点を中心として、2ページに図示したように設定した。

6月6日、試掘調査の結果もっとも遺構が検出された地区に発掘区（第Ⅱ地区）を設定、表土の除去と遺構の検出作業を始めた。発掘区の面積は約750㎡。

6月14日、表土下に埋もれていた遺構が次々と姿を現し、しだいに遺跡の全容が明らかとなった。

6月15日、遺構の掘り込みを開始。遺構を覆う黒味がかかった土を取り除き、埋没した遺構を当時の姿のままによみがえらせる作業である。掘り込みは土層観察用の畦を残しながら用心深く行った。遺構の中には重なり合ったのもあり、その切り合い（どちらが古いか）を確かめるのに特に注意を払った。

6月中旬、掘り込みは竪穴住居から始める。1号～3号住居跡。防虫駆除のヘリコプターから遺跡の空中写真を撮影してもらう。

6月下旬、梅雨前線の活動が活発となり記録的な大雨、たびたび作業が中断。

7月上旬、梅雨の長雨、遺構の掘り込みは4号住居跡～7号住居跡へ移る。



遺跡の範囲をたしかめる

調査区を設定するため試掘を行った



表土を除く

→ 大形機械を使って表土(耕作土)を取り除く



遺構を検出する

地山をていねいに削っていくとしだいに遺跡が姿をあらわしていく



遺構を掘る

→ 姿をあらわした遺構を掘り込んでいく

7月中旬、掘り込みの終わった遺構から詳細な測量図を作っていく。

7月22日、遺構の掘り込みが完了。遺跡の全景および各遺構の写真撮影を行う。

7月下旬、各遺構の測量を続ける。また、第Ⅱ地区の東、古い川の跡と思われる地点に設定した試掘坑を完掘する。

8月2日、現地での発掘調査を無事終了した。作業が順調に終了できたのは、町内の国広・真口・小野地から集まっていた作業員の方々の努力に負うところが大きい。

発掘調査の結果得られた出土品の整理は山口県埋蔵文化財センターで行った。整理作業は、水洗い、破片の接合、復元、実測、写真撮影、収蔵台帳の作成の順に行った。

昭和61年1月、発掘成果を公表するための報告書作成作業を開始した。



遺構を掘る

記録的な梅雨の長雨で悪戦苦闘する



姿をあらわした遺跡

→ 竪穴住居や建物の跡が数多く発見された



写真を撮る

やぐらを組み立てその上から写真を撮り
記録する



遺跡を測る

→ 発見された遺跡の正確な測量図をつくる

調査の結果何がわかったか

姿を現した遺跡

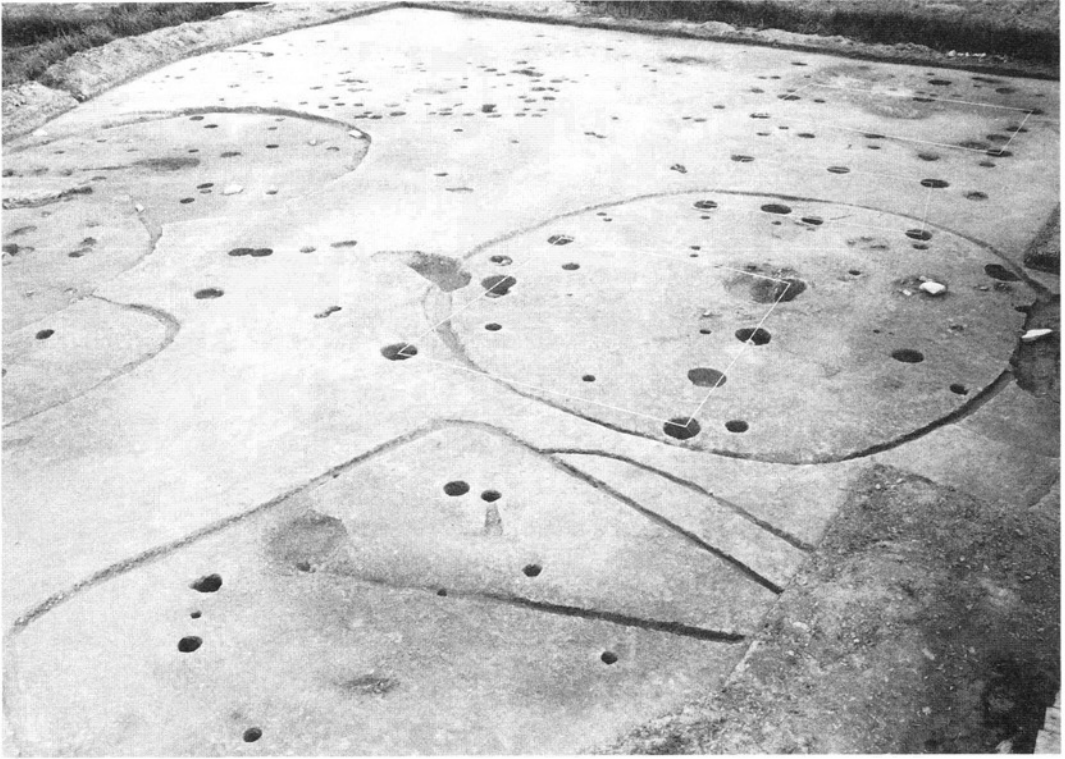
高畑遺跡は弥生時代中期から古墳時代初期にかけてのムラの跡（Ⅰ期）と、室町時代後期から江戸時代初期にかかる村落の跡（Ⅱ期）が重複した集落遺跡である。今回の調査で発見された遺構には、竪穴住居跡10軒、溝1条、土壇3基、古い河川の跡などⅠ期に属するものと、Ⅱ期に属する掘立柱建物3棟、耕地の跡と思われる階段状の地山削平の跡、柱穴多数などがある。

発見された遺構は第Ⅱ地区の発掘区全域と第Ⅲ地区にかけて広がっており、第Ⅰ地区・第Ⅳ地区・第Ⅴ地区には及んでいない（2p図参照）。第Ⅰ地区は第Ⅱ地区の北側にあり、遺構が広がっていた可能性もあるが、すでに比高差1m程度削平されており、遺構は消滅したものと考えられる。第Ⅱ地区の東に接する第Ⅳ地区は、古い河川の流路にあたり、現在でも湿地となっているので遺構の広がりには考えられない。第Ⅳ地区のさらに東にある第Ⅴ地区は、かつては今より山腹が張り出していたものと思われ、試掘調査でも遺構の発見は無かった。なお、第Ⅲ地区の試掘調査では遺構が検出されているが、いずれも残りが悪く、おそらくⅠ期には地山は南に向かって高くなっていたものと考えられる。以上の事実を総合すると、Ⅰ期のムラは古い河川跡と台地縁辺との間に南北に細長く広がっており、その広がりには最大でも約3,000㎡程度であったと推定できる。

第Ⅱ地区の発掘区における遺構検出面（地山、明黄褐色10YR7/6.粘質土）は、基本的には厚さ約20cmの耕作土（灰黄褐色10YR4/2.粘質土）の直下である。しかし、発掘区の東部では、Ⅱ期の耕地跡と考えられる階段状の地山の削平があるために、層序が異なっている。

右はその模式図であるが、耕土と遺構検出面の間には厚さ20～40cmの客土層（にぶい黄橙色10YR7/4.細礫混じりの粘質土、部分的に旧耕土・地山土混入）と旧耕土層（明灰色2.5Y 8/2.粘質土、瓦質土器・土師器・陶器の細片を含む）の2層が認められる。





姿をあらわした遺跡（南半部）



姿をあらわした遺跡（北半部）



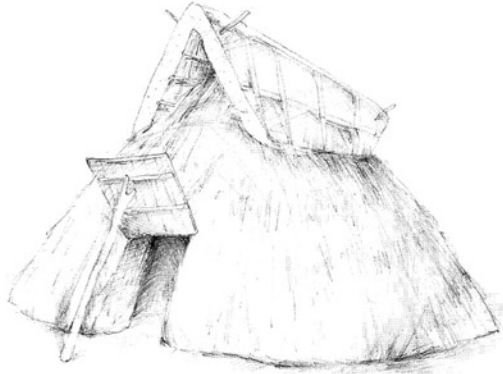
遺構配置図

発見された遺構

I期（弥生時代～古墳時代初期）の遺構

竪穴住居

縄文時代以来古代に至るまで、人々が生活を営んだ最も一般的な住居形式。地面を深く掘りさげて地下に床を造り、これに柱を建て屋根で覆った半地下式の住居である。弥生時代の竪穴住居は、外から見ると屋根しか見え、左図のような姿だったと思われる。しかし、遺跡から発掘される竪穴住居は多くの場合合床の部分であり、その平面形や柱穴の配置から住居の構造を復原しなければならない。



竪穴住居の復原図

現在残っているのは住居の床の部分で、本来その上に図のような屋根があった。

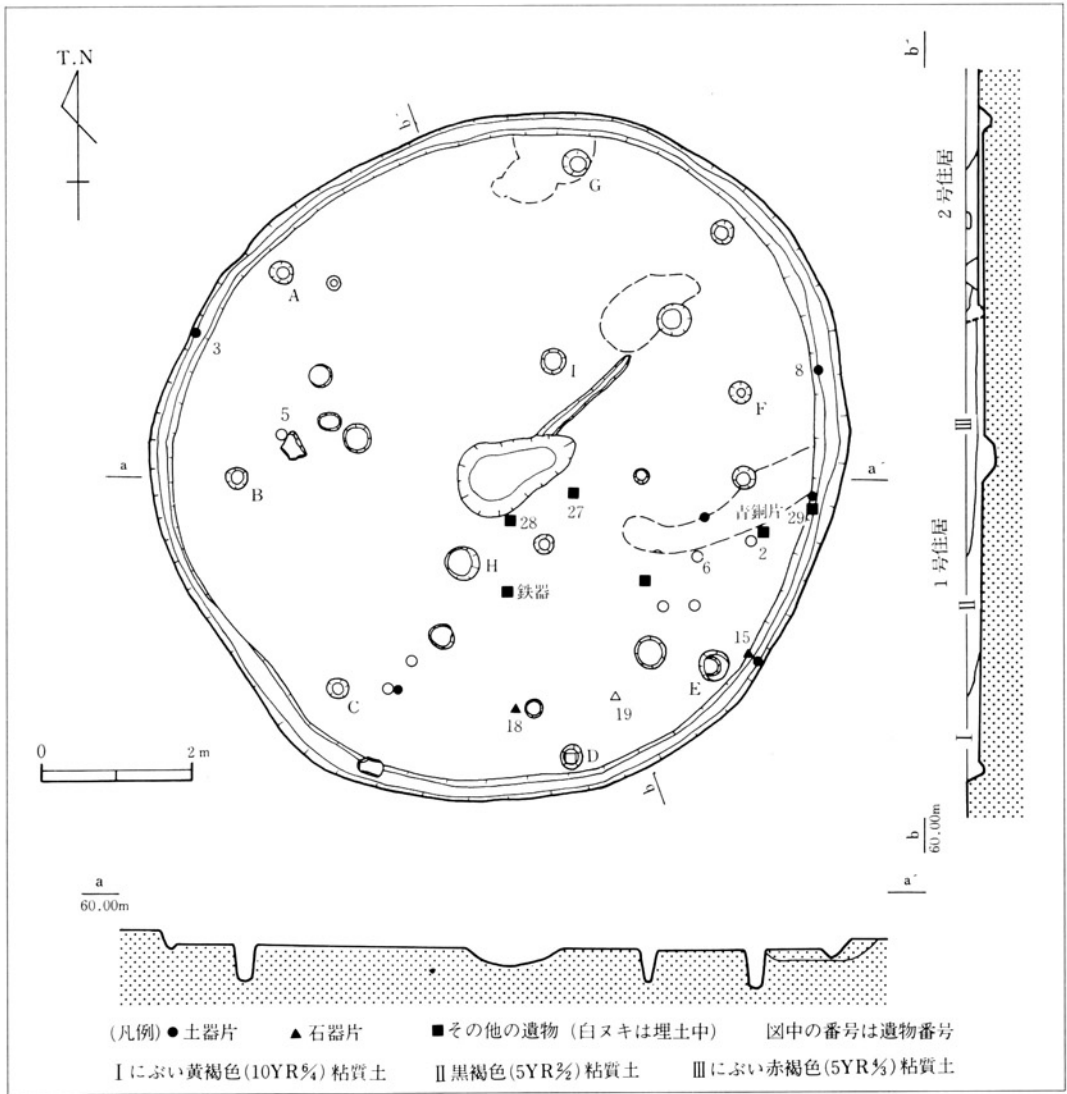
1号住居（DW-1）

第Ⅱ地区発掘区の中央東寄りに検出された竪穴住居である。後世の耕作によって削平され、床面と深さ20cm程度の壁が残っているだけである。住居の北半部は2号住居によって切られているが、床面はかろうじて残存している。また、住居の床面には、この住居に先行すると見られる溝状遺構・柱穴があり、住居の南東部では他の住居の周溝と思われる遺構を切っていることから推して、この住居が築かれる時に先行する住居を破壊した可能性がある。

平面形は円形をなし、直径約9.2m、床面積約57㎡の規模を持つ大形の住居である。主柱穴は壁面に沿って7本が円形に配列されている（図中A～G）が、別に中央穴を挟んで2本（H～I）の支柱穴が配された可能性がある。主柱穴の間隔は一定せず広いもので4.2m（A～G）、狭いもので2.25m（D～E）を測る。中央穴は1.7m×0.5mの不整な楕円形をなし、深さ約0.25m、炭や焼土の薄い層で覆われていた。床面壁ぎわには、25～30cm深さ15cmの周溝がめぐっている。また、床面の西の部分と南周溝中に工作台と思われる平石が残されていた。床面の標高は59.3m、北にむかってかすかに低くなっている。

埋土中および床面上から多くの遺物が検出されたがその大半は細片である。主な遺物には甕形土器（遺物番号1～3.6.8）、壺形土器（4.5）、砥石（15.16）、石鏃（18.19）、勾玉未製品とおもわれる石製品（27）、ガラス小玉（28.29）などがある。

この住居が営まれた時期は、床面上の土器から推して、弥生時代終末期と思われる。



▲ 1号住居実測図



1号住居 ▶

2号住居 (DW-2)

第Ⅱ地区発掘区の中央東寄り、1号住居の北半に重複して検出された竪穴住居である。後世における削平により、床面と深さ15cm程度の壁が残っているだけである。住居の南半部は1号住居を切っている。また、住居廃棄後にこの住居に重複して別の遺構が築かれており、床面に焼土の集塊と小柱穴が重複している。住居の東部は現畦畔に切られている。

平面形はやや楕円形をなし、長軸径約10.6m 短軸径約9.3m 床面積約71㎡の規模を持つ大形の住居である。支柱穴は壁面に沿って6本 (図中A～F) 認められるが、本来は7本が円形に配列されていたものと思われ、ほかに中央穴を挟んで2本 (G～H) の支柱穴が配された可能性がある。支柱穴の間隔はほぼ一定しており3.3mを測る。中央穴は1.5m×1.2mの楕円形をなし、深さは約30cmである。床面壁に沿って幅25～35cm深さ10cm断面V字形の周溝がめぐっている。床面はほぼ平坦。床面の標高は59.25mである。

埋土中および床面上から多くの遺物が検出されたがその大半は細片である。主な遺物には甕形土器 (遺物番号7.10)、ミニチュア土器 (9)、石斧 (14)、石鏃 (20～24)、勾玉 (26)、ガラス小玉 (30.31) などがある。

この住居の時期は、甕形土器 (7.10) から推して、古墳時代初頭と思われる。

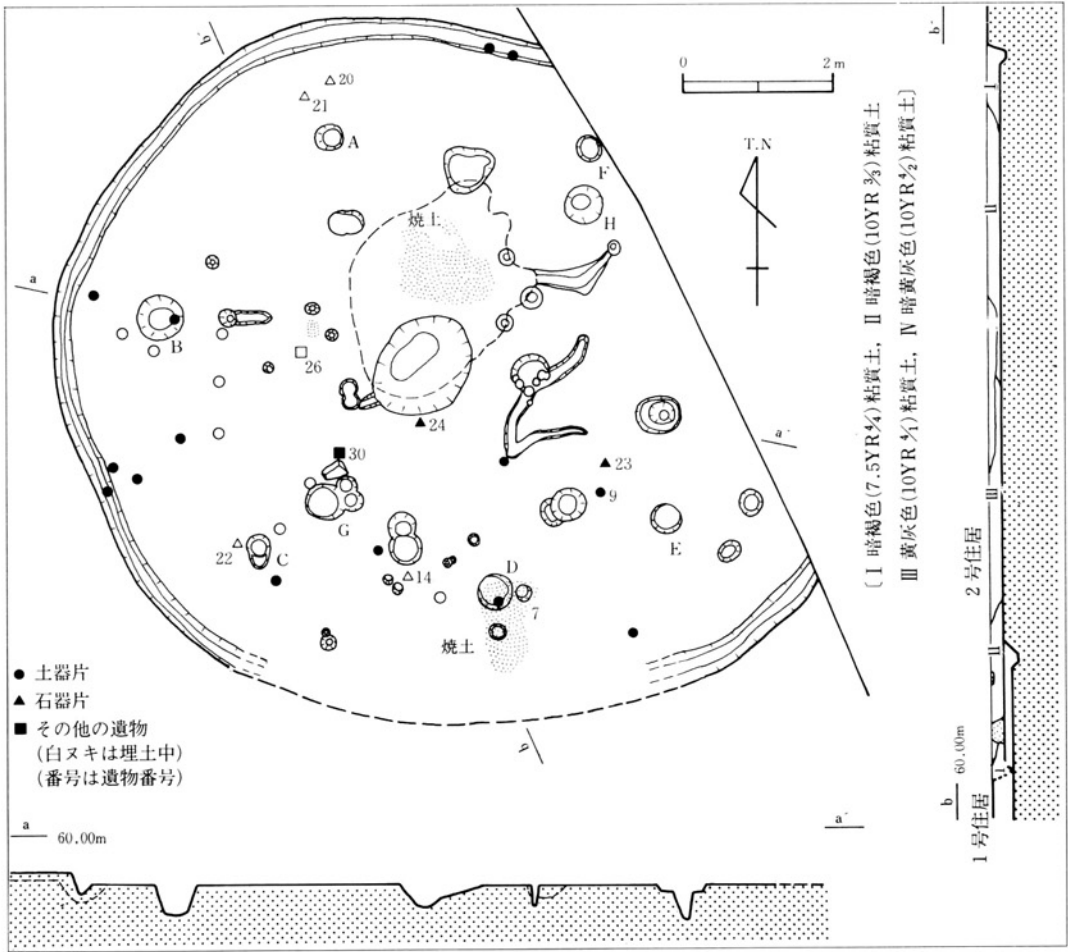


◀ 2号住居

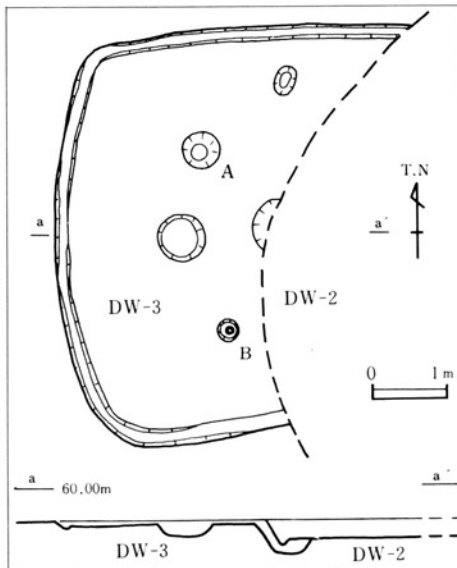
3号住居 (DW-3)

発掘区の中央やや北よりにある竪穴住居。後世の削平により床面のみが残存している。住居の東半部は2号住居により切られ、完全に消滅している。平面形はやや銅張りの方形をなし、一辺5.5m、床面積約25㎡ (共に推定) の規模を持つ。支柱穴は4本 (A.Bなど)、方形に配されていたと思われる。周溝は幅20cm深さ5cm。

遺物の出土は少ないが、この住居は2号住居にやや先行する時期のものであろう。



2号住居実測図



▲ 3号住居

◀ 3号住居実測図

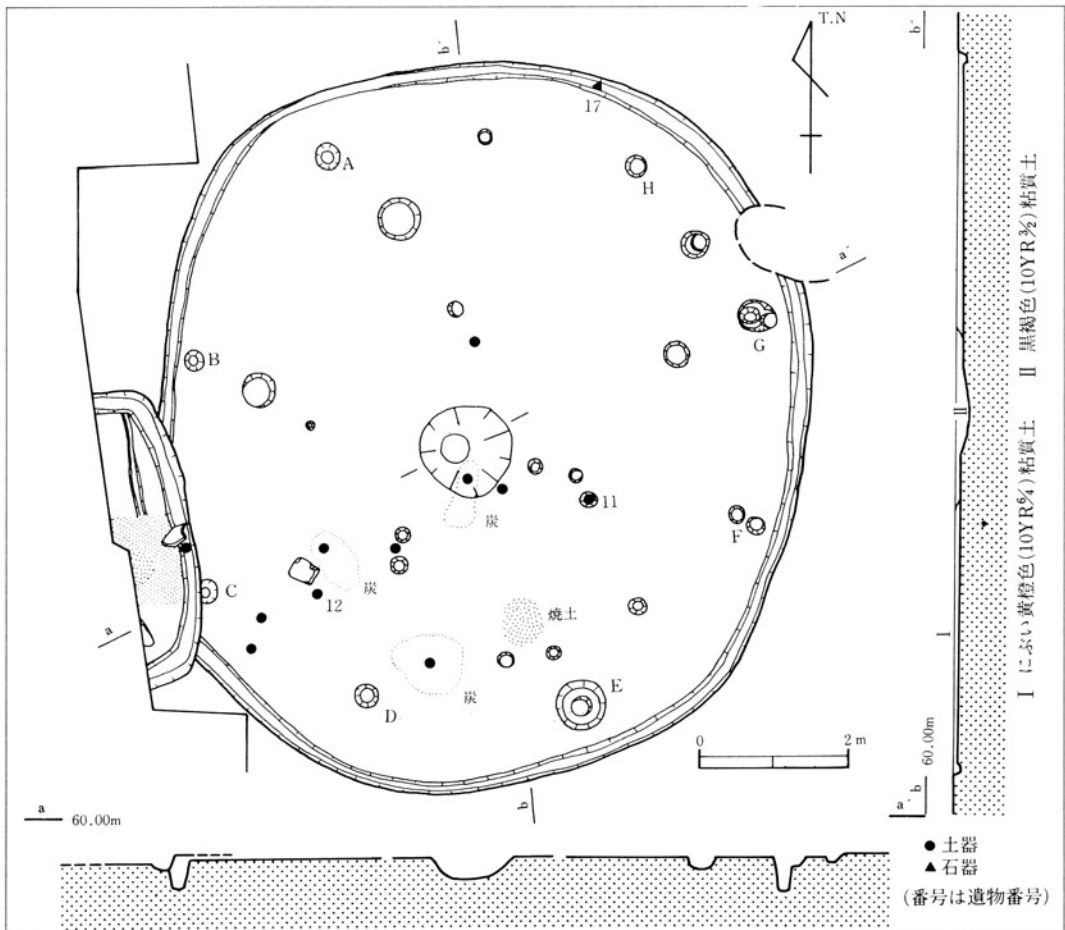
4号住居 (DW-4)

第Ⅱ地区発掘区の中央西寄りに検出された竪穴住居である。床面と深さ10cm程度の壁が残っているだけである。住居の西端部を7号住居に切られている。

平面形はやや楕円形をなし、長軸径約9.7m 短軸径約8.7m 床面積約66㎡の規模を持つ大形の住居である。主柱は壁面に沿って8本 (図中A～H) 配置されている。内部の支柱は認められない。主柱穴の間隔はやや不揃いであるが、2.6～3.3mの間には納まるようである。中央穴は直径1.2m 深さ約30cmでほぼ円形をなし、内面は薄い炭の層で覆われていた。床面には壁に沿って幅20～25cm 深さ5cmの周溝がめぐっている。住居の南西部床面上に工作台とみられる平石が置かれている。床面はほぼ平坦。床面の標高は59.45mである。

埋土中および床面上から遺物が検出されているがその大半は細片である。主な遺物には甕形土器 (遺物番号11.12)、砥石 (17) などがある。

時期決定が可能な遺物はないが、住居の形態から考えて、この住居は1～3号住居と大差無い頃に営まれたものと思われる。



4号・7号 住居実測図

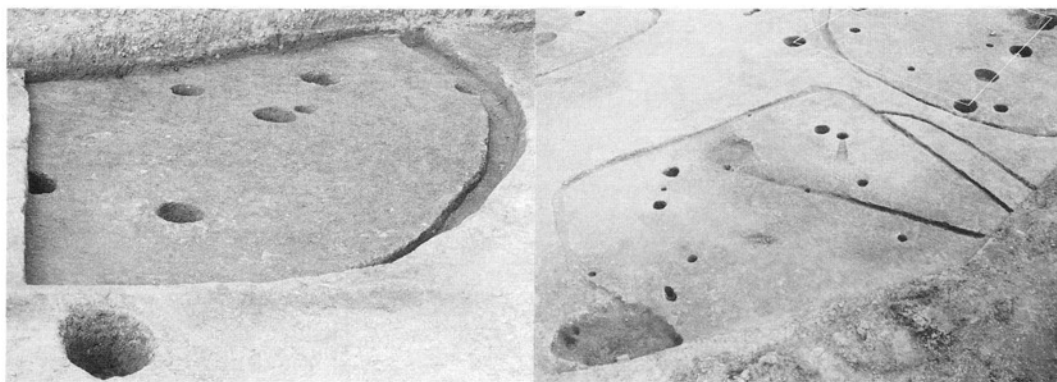
4号・7号住居 ▶



5号住居 (DW-5)；発掘区の北端にある竪穴住居。後世に削平され約1/4が残存している。平面形は円形。直径約8m床面積約41㎡の規模を持つ（いずれも推定）。主柱の配列は不明であるが、おそらく4本柱の構造と思われる。主柱穴の間隔は推定3.3mである。床の標高は約59.2m。遺物は土器細片のみ。住居の時期は不明であるが、住居規模がやや小形である反面、4本柱の構造をとることから推して、弥生時代後期後半以降と考える。

6号住居 (DW-6)；4号住居の北にある方形の竪穴住居で、周溝のみが残存している。一辺の長さ約6.3m床面積約36㎡の規模を持つ（推定）。主柱の配列は不明。住居の形態から、住居の時期は1～6号住居と大差無いものと考えられる。

7号住居 (DW-7)；4号住居の西にあり、これを切っている。平面形は方形（推定）で、一辺の長さ約4m床面積約11.5㎡の規模を持つ（推定）。主柱の配列は不明。床面に炭と焼土の集塊が認められる。東辺周溝の中に工作台とみられる平石が残されている。住居は4号住居に後続するものの、あまり大差の無い時期のものであろう。



5号住居

6号住居



◀ 8号住居の柱穴群

その他の住居

1号住居の南で、柱穴の配列から竪穴住居の跡とみられるものが2軒確認された。後世の削平により住居の床面が消失し、柱穴や中央穴が痕跡的に残ったものと思われる。

8号住居 (DW-8) は円形プランを持つ竪穴住居である。中央穴とみられる径80cmの炭混じりの土壇を中心にして柱穴が円形にめぐっている。しかも柱穴は重複しながら密集しているため、数回の建て替えが行われた可能性が考えられる。規模は、他の住居の柱穴と壁の間隔を参考にして考えると、直径7.8m程度になるだろう。主柱は7～8本、その間隔は2.0～2.5m。土壇を囲んで等間隔に並ぶ6個の柱穴は支柱と思われる。

9号住居 (DW-9) は8号住居の東に隣接している。やはり円形のプランを持つものと思われる。同様に規模を推定すると、直径6.4m程度になるだろう。主柱は7本(推定)、円形に配されている。支柱は2～4本あった可能性が高い。

この2軒の住居の時期は、規模が他と比べて小さく削平がひどいことから、1～7号住居よりは先行すると思われるが、9号住居の主柱穴のひとつから弥生時代中期後半の壺破片(遺物番号32)が発見されているので、弥生時代中期後半かそれ以降に比定できよう。

また、第Ⅲ地区の試掘坑からも竪穴住居状遺構が発見されている。**10号住居 (DW-10)** と名付ける。削平がひどく全容は不明であるが、推定直径約8mの円形竪穴住居である。

1号溝 (D-1)

2号住居北の弧状の溝。現存長約10mを測り、断面は最大幅約60cm深さ約20cmの浅いU字形をなしている。溝底面の高さは東に向かって低くなっており、この溝が集落内の排水溝で、第Ⅳ地区すなわち旧河川の方向に注いでいたことが想像できる。主な遺物は、甕形土器(遺物番号13)と石鏃(25)。1～7号住居に先行する時期の遺構であろう。

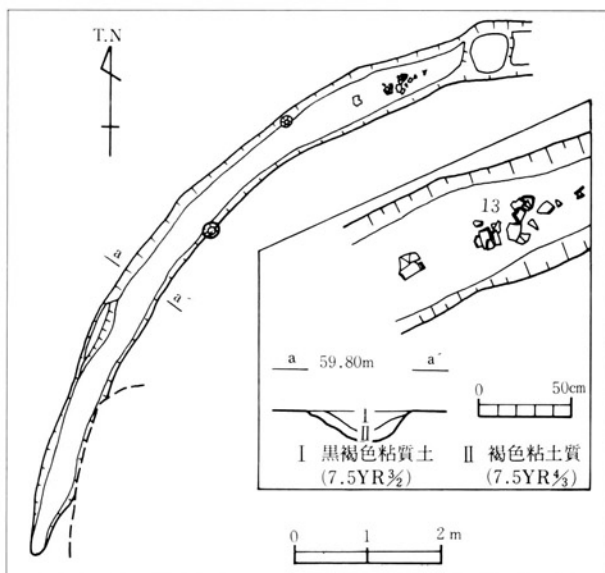
旧河川の跡

遺跡地の現在の畦畔をみると、第IV地区を通って南北方向に狭小な水田が並んでおり、しかも水田面は他と比べて凹んでいる。この地形は古い河川の跡地である可能性が高い。そこで、その規模や時期を知るために試掘を行った。試掘坑は15m×2mの大きさである。

試掘坑の断面と層序は下に図示したとおりである。基本的層序は上から、耕土、盤土、旧河川の埋土、地山の順に確かめることができる。河川の幅は少なくとも10m以上、15m程度はあったものと思われる。遺物は極めて少く、この河川が機能していた時期を推定することが困難であるが、土器の細片はいずれも弥生土器であり、中に中期の壺形土器と思われるものも含んでいる。I期のムラが営まれた頃に機能していたか、あるいは、この川が遺跡のある台地上を南北に流れていることから考えて、ムラを廃絶させる原因となった大水の跡の可能性もある。

柱 穴

I期に属する柱穴の埋土には、黒褐色(10YR3/1)と赤褐色(2.5YR4/8)の二種類がある。新旧関係は不明。



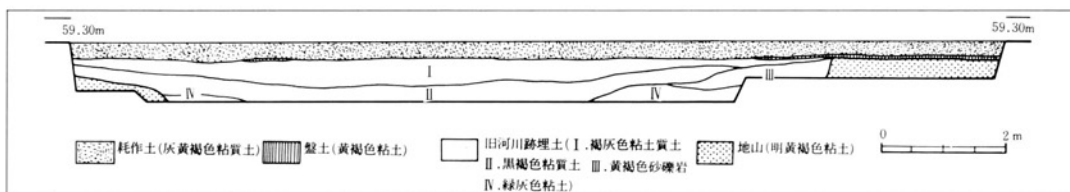
溝 実測図



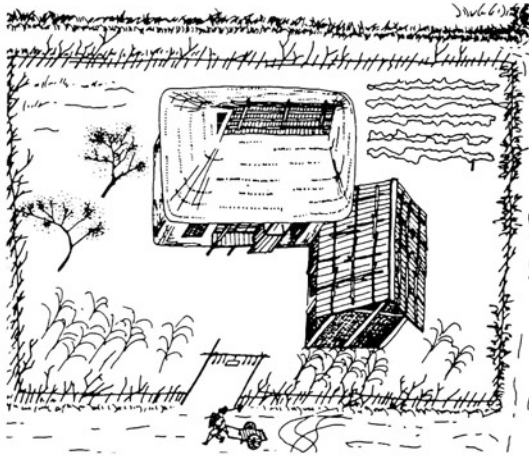
溝



旧河川跡



旧河川跡土層断面実測図



中世の掘立柱建物復原図
(防府市下右田遺跡)

Ⅱ期（室町時代～江戸時代初期）の遺構

掘立柱建物

平安時代から中世になると、庶民の住居は竪穴住居に代わって、新しい構造のものになった。これは、地面に穴を掘り柱を建てて固定した平地式の住居で、掘立柱建物と言う。床は平地に造られるが、発掘調査で検出される例は極めて少いため、土間床であったのか張床であったのか定かではない。建物の規模は、2間×3間のように、柱間の数で表す。

高畑遺跡で発見された掘立柱建物は3軒、いずれも発掘区の西部から南西部にかけて営まれている。一方、東部から北部にかけては同時期の耕地跡とみられる階段状の地山削平跡が検出されている。典型的な農村集落の景観を想像することができる。

1号建物（B-1）

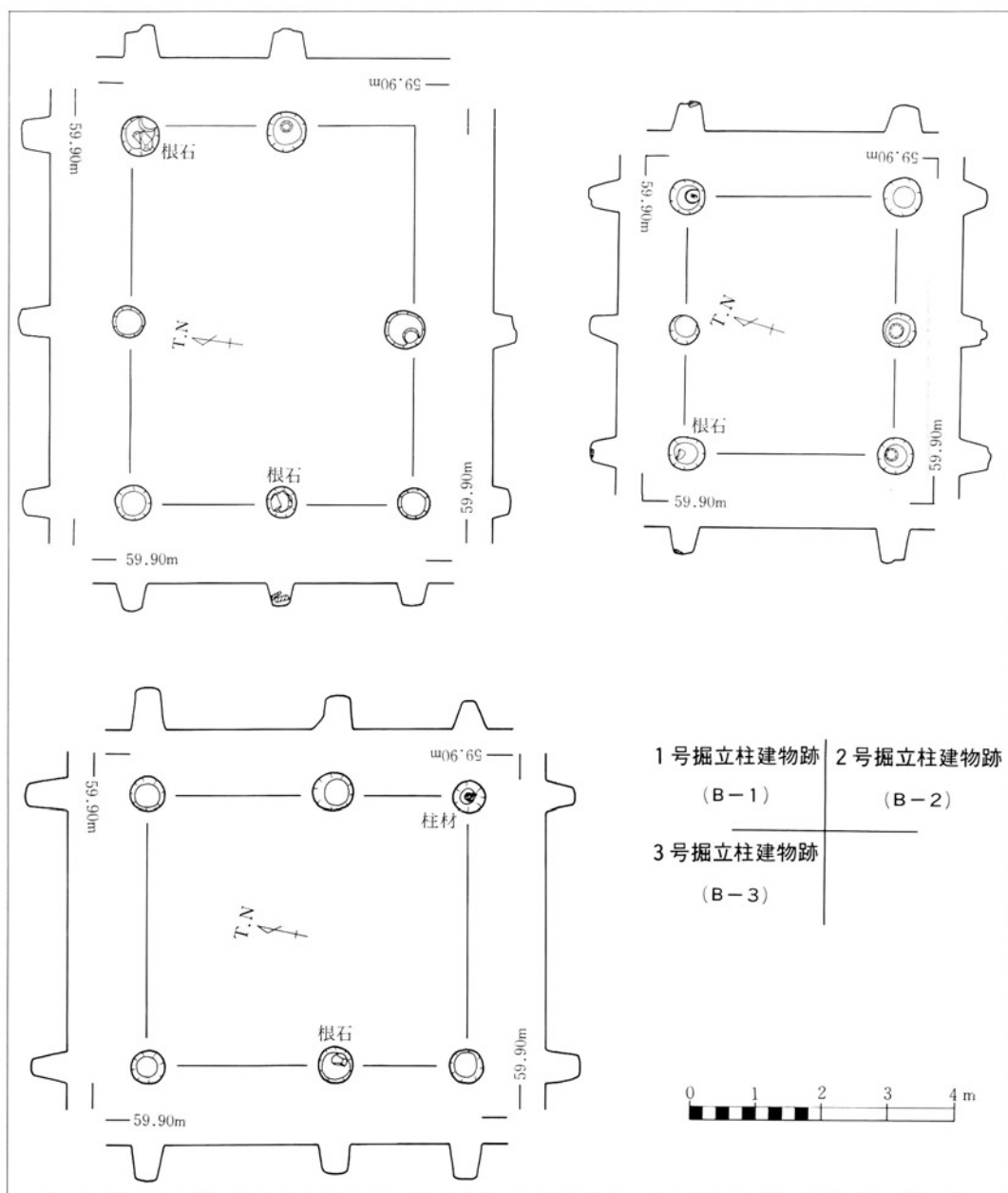
発掘区の最も南にある掘立柱建物である。本来は8個の柱穴から構成される2間×2間の規模の建物であるが、南東隅の柱穴は検出できなかった。礎石を利用したのかもしれない。棟方向はN-82°-E、ほぼ東西方向である。建物の大きさは桁行方向に約5.7m、梁行方向に約4.3m、面積は約24.5㎡である。柱の間隔は桁行方向で2.8m、梁行方向で2.2m、一定している。柱穴は径50～60cmで大きい。しかし、柱穴底に残る柱の痕跡からみると、柱の大きさは径20cm程度であったと思われる。2個の柱穴内に柱を固定するための根石が残っている。また、建物の周囲にはこれを囲んで一定間隔の柱穴が認められる。塀もしくは垣根状の施設があったのだろう。

2号建物（B-2）

1号建物北の掘立柱建物である。6個の柱穴から構成される2間×1間の規模の建物である。棟方向はN-72°-E、ほぼ東西方向である。建物の大きさは桁行方向に約3.9m、梁行方向に約3.2m、面積は約12.5㎡である。柱の間隔は桁行方向で3.9m、梁行方向で2.0m、一定している。柱穴は径50～60cmで大きい。やはり柱穴底の痕跡からみると、柱の大きさは径20cm程度であったと思われる。

3号建物（B-3）

2号建物北の掘立柱建物である。6個の柱穴から構成される2間×1間の規模の建物である。棟方向はN-11°-W、ほぼ南北方向である。建物の大きさは桁行方向に約4.9m、梁行



掘立柱建物実測図

方向に約4.1m、面積は約20.1㎡である。柱の間隔は桁行方向で4.9m、梁行方向では北部が2.8m、南部が2mである。柱穴は径50～65cmと大きい。南東隅の柱穴には径20cm程度の柱材の一部が残っていた。

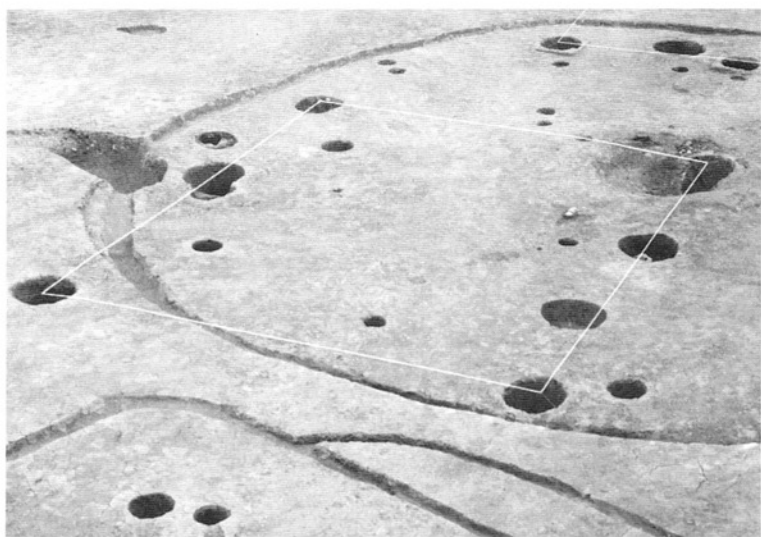
建物の柱穴および階段状の平坦地に残る旧耕土中からは、わずかに瓦質土器や陶器の細片が発見されている。これだけの資料によって建物の時期を決定するのは困難であるが、陶器の細片が李朝陶器もしくは初期萩焼に類似するので、室町末期～江戸初期と考えた。



◀ 1号建物



◀ 2号建物



◀ 3号建物

発見された遺物

高畑遺跡から発見された遺物は、土器片3164点、瓦質土器片5点、陶器片6点、石器・石製品14点、黒曜石剥片57点、鉄器片9点、青銅器片1点、ガラス小玉4点、木片3点など総計3,263点にのぼる。しかし、遺物は細片でありしかも腐朽が激しいため、図化できたのは以下に紹介する31点だけである。

土器 (27.28ページ図参照)

甕形土器 (遺物番号1) ; 1号住居床面から出土した口縁部片である。口縁部はくの字状に外折し端部を丸くおさめている。胴部はやや張り出し、器壁は薄い。器表は腐朽のため剥落し調整痕は不明。口外径は24.7cmを測る。胎土は精良であるが1~2mm前後の砂粒を多く含む。浅黄橙色 (10YR8/3) を呈し、焼きは良い。

甕形土器 (遺物番号2) ; 1号住居埋土から出土した口縁部片である。口縁部はくの字状に外反し端部は平坦である。胴部はやや張り出し、器壁はやや薄い。器表外面はハケ調整、内面は胴上半までヘラ削り、口縁部は横ナデ調整を行っている。口外径は16cmを測る。胎土はやや精良であるが1mm前後の砂粒を多く含む。外面は浅黄橙色 (10YR8/6)、内面はにぶい黄橙色 (10YR7/2) を呈し、焼きはやや良。

甕形土器 (遺物番号3) ; 1号住居周溝から出土した口縁部片である。口縁部は端部が短く上方に立ち上がるタイプの複合口縁である。頸部直下に貝殻を利用したとみられる押し引き文が施され、ナデ調整を行っている。器壁は厚い。口外径は19.7cmを測る。胎土はやや精良、1mm前後の砂粒と赤褐色の粒子を多く含む。にぶい黄橙色 (10YR7/2) を呈し、焼きは良い。この種の土器は山口県北東部から島根県石見地方に類例を見る事ができる。

壺形土器 (遺物番号4) ; 1号住居埋土から出土した口縁部片である。口縁部は端部が立ち上がって内傾するタイプの複合口縁である。口外径は15cmを測る (推定)。胎土は粗く1~2mm前後の砂粒を多く含む。外面はにぶい橙色 (7.5YR7/4)、内面はにぶい黄褐色 (10YR6/3) を呈し、焼きは悪い。この種の土器は西部瀬戸内地方に類例を見る事ができる。

壺形土器 (遺物番号5) ; 1号住居埋土から出土した口縁部片である。口縁部は鋤形口縁。口外径は28.8cmを測る。胎土は粗く細砂粒と赤褐色の粒子を多く含む。浅黄橙色 (7.5YR8/6) を呈し、焼きは良い。弥生時代中期の北部九州須玖Ⅱ式系の土器である。

甕形土器 (遺物番号6) ; 1号住居埋土中の胴上部片である。ハケの原体によるとみられる波状文がある。器表外面はハケ調整。胎土は粗く砂粒多い。にぶい黄褐色 (10YR5/4) を呈し、焼きは良い。山陰系複合口縁を持つ甕の破片であろう。

甕形土器 (遺物番号7) ; 2号住居床面からの出土で、ほぼ完形に復元できる。口縁部はくの字状に強く外反し端部は丸く納める。胴部は倒卵形で、底部は丸みを持つ。器壁は

やや厚く、外面胴部下半に二次的加熱のための変色部がある。器表外面の調整不明、内面はハケ調整の後胴上半までヘラ削り、口縁部は横ナデ調整を行っている。口外径12.5cm、胴部最大径14.4cm、器高17.4cmを測る。胎土は粗く1～2mm前後の砂粒を多く含む。外面は黄褐色（10YR6/6）、内面は浅黄橙色（10YR8/3）を呈し、焼きは不良。

甕形土器（遺物番号8）；1号住居周溝からの出土で、胴下半部が残る。胴部最大径は胴中央にあり、強く張っている。底部は平底である。器表外面の調整は不明、内面には指頭による成形痕が残っている。胴部最大径11cm、底径3cmを測る。胎土は精良で1～2mm前後の砂粒を多く含む。浅黄色（2.5YR8/4）を呈し、焼きは良い。

ミニチュア土器（遺物番号9）；2号住居埋土から出土した脚付鉢形土器で、ほぼ完形に復元できる。成形は手づくねによる。口外径3.5cm（推定）、脚底外径3.7cm、器高3.8cm（推定）を測る。胎土は精良、砂粒を含む。外面は明赤褐色（5YR5/8）、内面はにぶい橙色（5YR7/4）を呈し、焼きは良い。

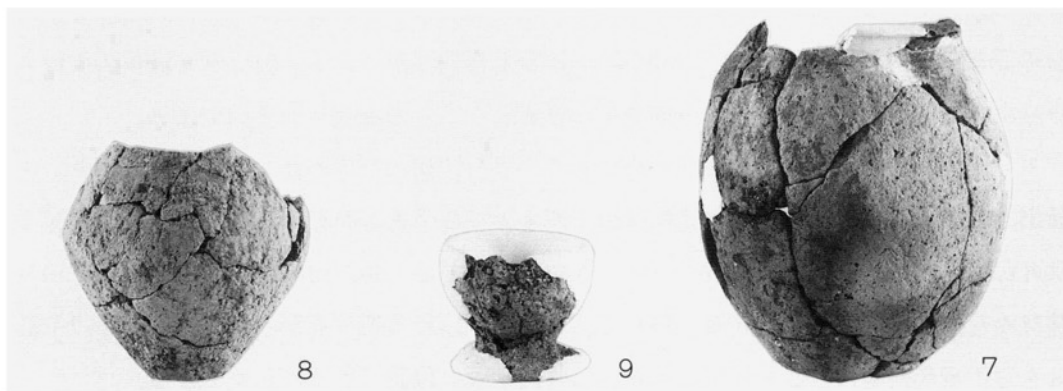
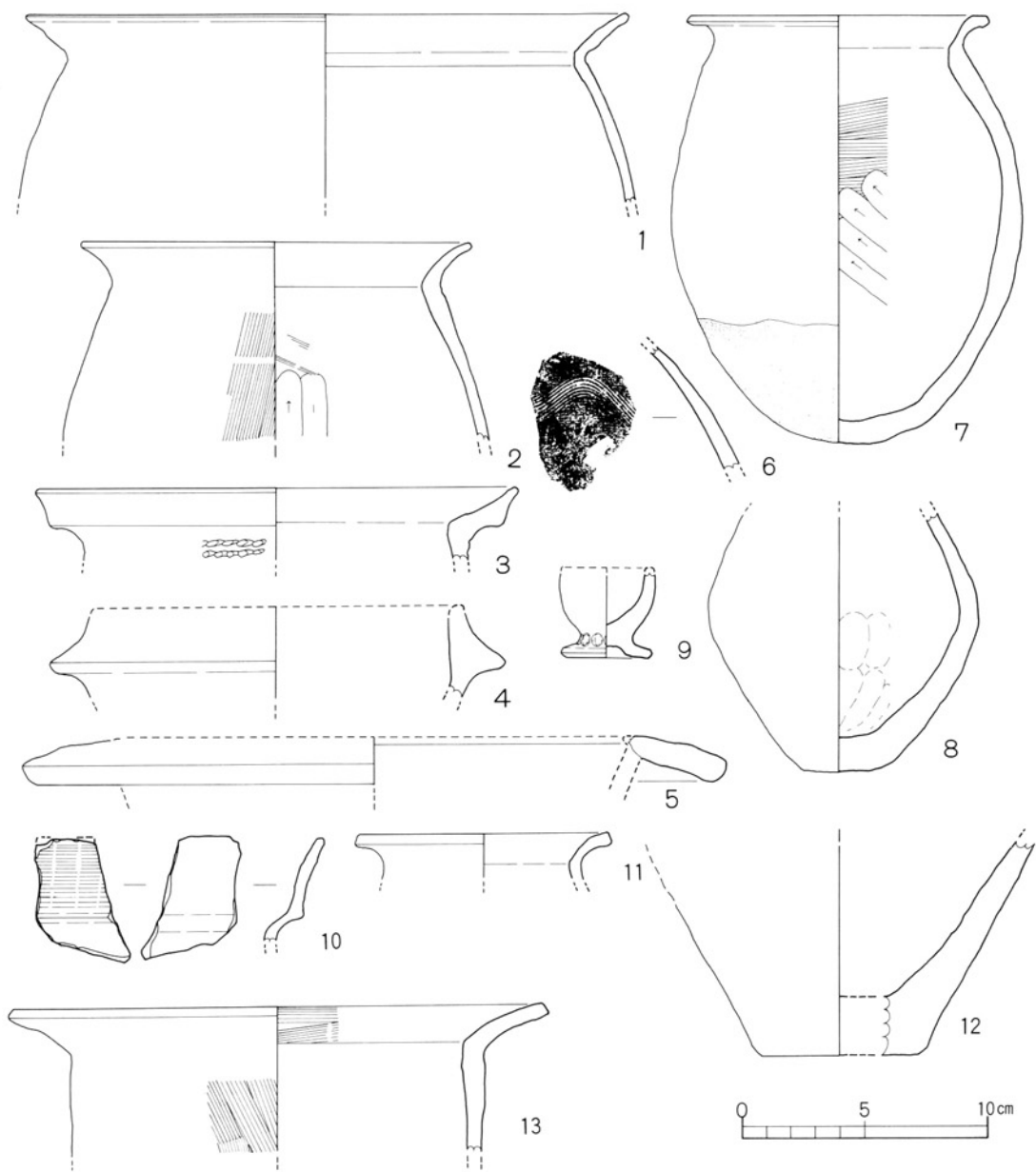
甕形土器（遺物番号10）；2号住居埋土から出土した口縁部片である。口縁部は端部が外傾ぎみに大きく立ち上がる複合口縁である。口縁部外面にハケ状原体を利用したとみられる浅い平行沈線様擦過痕がある。器壁は薄い。胎土は精良、少量の砂粒と角閃石の粒子を含む。浅黄橙色（10YR8/3）を呈し、焼きは良い。いわゆる山陰系複合口縁である。

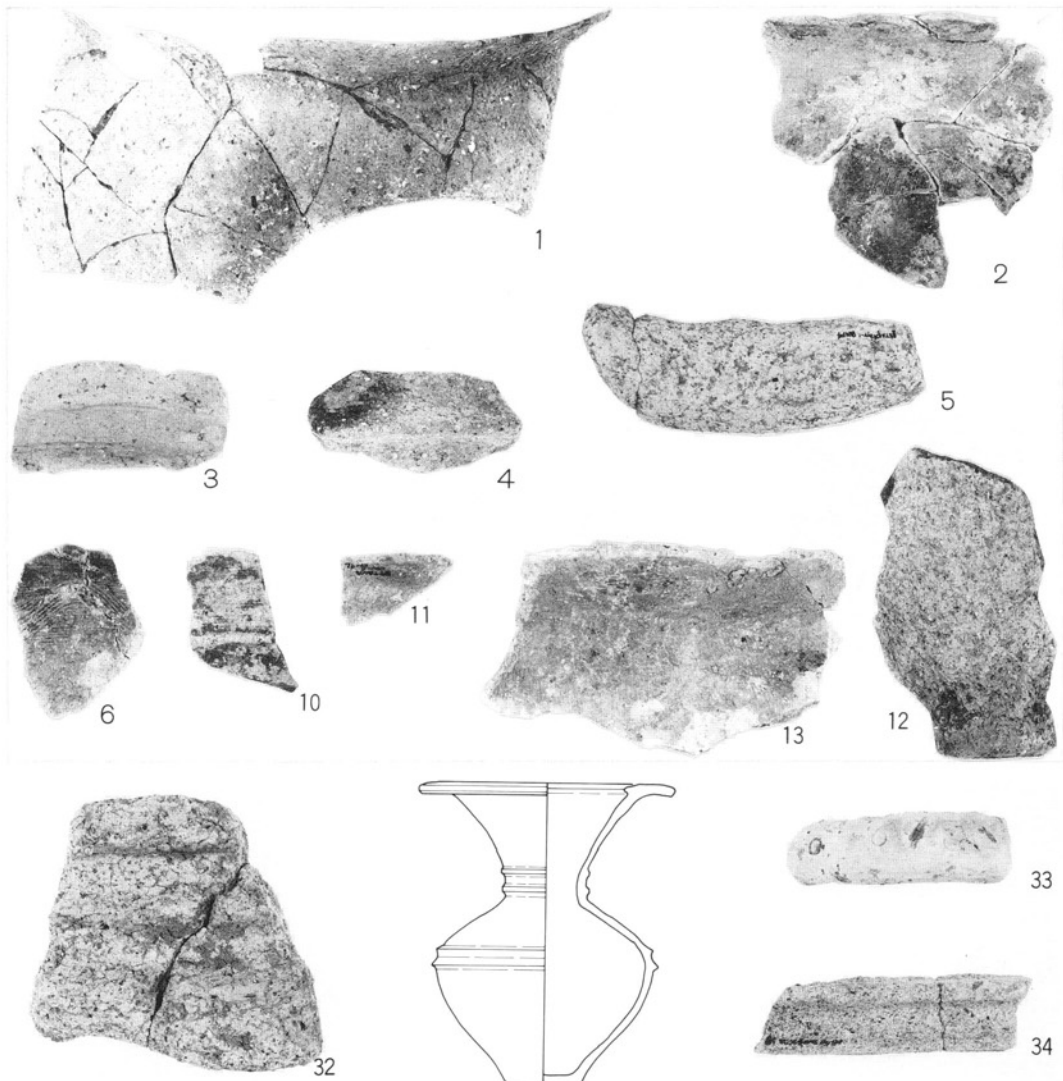
甕形土器（遺物番号11）；4号住居床面から出土した小形の甕口縁部片である。口縁部はくの字状に外反し端部は平坦である。器壁は薄い。器表の調整は不明。口外径は10.5cmを測る。胎土は精良であるが1mm以下の細砂粒を多く含む。外面は浅黄橙色（7.5YR8/3）を呈し、焼きは良い。

甕形土器（遺物番号12）；4号住居床面からの出土で、底部が残る。底部はしっかりとした平底である。器表の調整は不明。底径約6.5cmを測る。胎土は粗く1～2mm前後の砂粒を多く含む。器表外面は橙色（2.5YR6/8）、内面はにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈し、焼きは悪い。

甕形土器（遺物番号13）；1号溝底面から出土した口縁部片である。口縁部はくの字状に外反ぎみに開き、端部は平坦である。胴部の張りはなく、器壁はやや厚い。器表外面と口縁内面はハケ調整、口縁外面は横ナデ調整を行っている。口外径は22cm、胴部最大幅は頸部近くにあり径17cmを測る。胎土は精良であるが1mm以下の細砂粒を多く含む。外面は浅黄橙色（7.5YR8/6）、内面は灰白色（10YR8/2）を呈し、焼きは良い。

28ページの写真中、遺物番号32は弥生時代中期の壺形土器頸部片である。3条の突帯が認められる。遺物番号5の鋤形口縁か、下垂する口縁を持つ壺の一部であろう。同じく33は注口土器の取手の一部で、34は壺胴部突帯の一部とみられる。共に弥生終末期に属す。





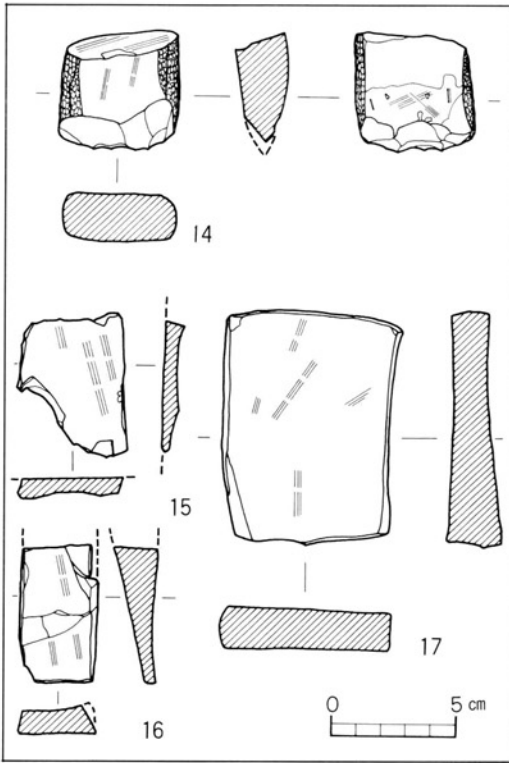
弥生時代中期の土器

弥生時代中期の土器

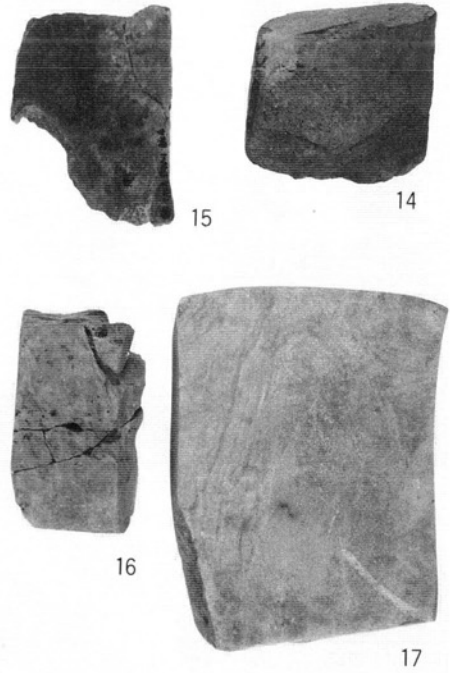
弥生時代後期の土器

これらの土器は、遺跡あるいは各遺構の時代を考える上での重要な手掛りである。高畑遺跡は弥生時代中期後半から営まれたと考えたが、その根拠の一つは遺物番号7.31の壺形土器の存在である。特に7は弥生中期後半に北部九州を中心に広がりを見せる須玖Ⅱ式土器の系統に属するものであり、31も同期の壺形土器頸部片である。31は9号住居の支柱穴から出土しており、この住居が中期後半に営まれたことが推測されるのである。

1号住居と2号住居は、その切り合いから、2号住居のほうが新しいことがわかる。床面出土の土器を比較しても、1号住居の土器8が平底であるのに対し、2号住居の土器7は丸底であり新しい様相を持っている。さてその時期は、共に山陰系の土器である3.10の検討から推測することができる。詳しくは31ページ以降に述べるが、1号住居床面の土器3を弥生時代終末に、2号住居の10を古墳時代初頭に位置づけることができる。



石斧・砥石実測図



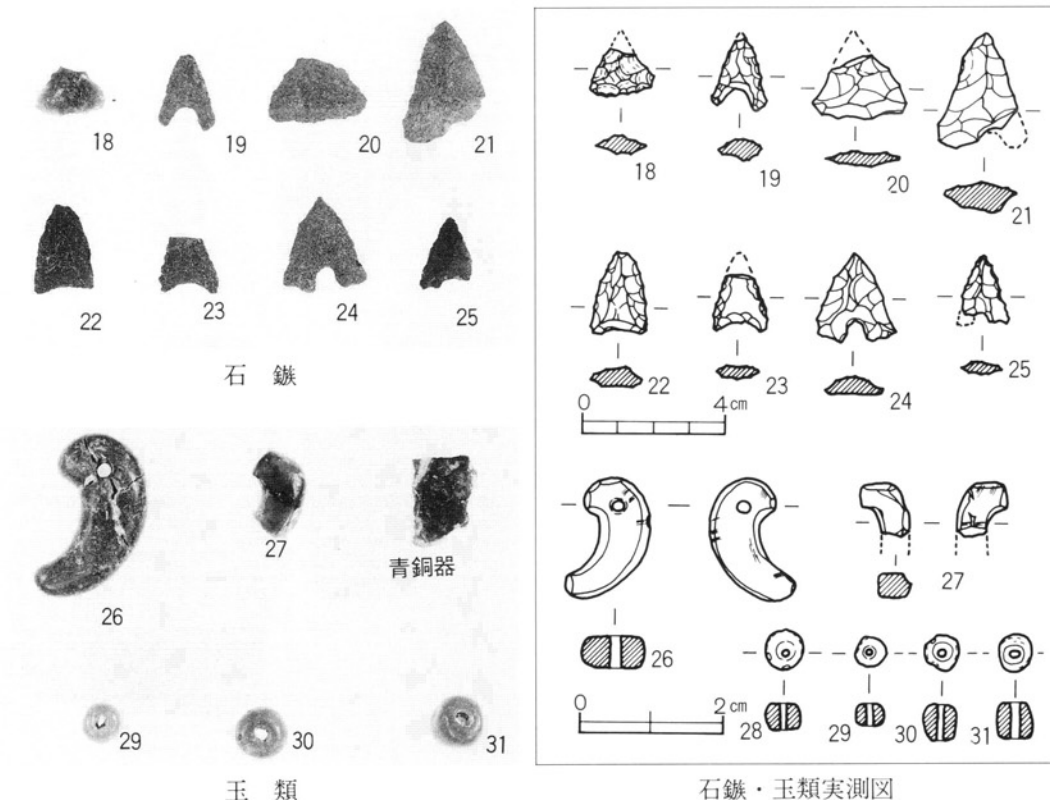
石斧・砥石

石器

石器には、太型蛤刃石斧片1点、砥石片3点、石鏃8点などがある。また、このほかに石器製作時に生じたと思われる黒曜石の剥片が多く採集されている。なお、石材の鑑定は橋本恭一氏（山口県立山口博物館）にお願いした。

太型蛤刃石斧片（遺物番号14）；2号住居埋土出土の刃部に近い破片である。刃部は欠失している。全面に研磨を認めることができるが、側縁部には敲打痕が良くのこっている。一方、上部の折損面はよく研磨されており、折損後に砥石として再利用された可能性が考えられる。現存長4.5cm、最大幅4.9cm、現存厚2cmを測る。石材は凝灰岩質岩石である。

砥石片（遺物番号15～17）；15は1号住居から発見された砥石の一部で、一面の一部が残存したものである。石質のきめは細やかで現在の仕上砥石にあたる。現存長5.8cm、現存幅4.2cm、現存厚0.75cmを測る。石材は粘板岩である。16は1号住居から発見されたもので、半分に欠損した砥石の一部である。5面の研磨面が認められる。石質はやや軟質できめは細やかであり現在の仕上砥石にあたる。現存長5.5cm、最大幅3.1cm、最大厚1.8cmを測る。石材は粘板岩質岩石である。17は4号住居から発見された完形の砥石である。一部欠失はあるものの、全面に使用の跡である研磨面が認められる。石質はやや軟質できめは細やかであり現在の仕上砥石にあたる。長さ9.4cm、最大幅7.5cm、最大厚2.3cmを測る。



石材は粘板岩質岩石である。

石鎌（遺物番号18～25）；石鎌は8点、1号住居2点、2号住居5点、1号溝1点の出土である。形態別には、基部が平坦なもの2点（18.19）、やや凹みぎみのもの2点（22.23）、大きく凹むもの4点（19.21.24.25）がある。大きさは、大形のもので長さ3.1cm 重さ4g程度（21）、小形のもので長さ1.8cm、重さ0.9gを測る。石材は姫島産黒曜石1点（18）を除いてすべて流紋岩質岩石である。

玉類

勾玉（遺物番号26.27）；26は2号住居出土の完形の勾玉である。均整のとれた浅いC字形をなしており、穿孔は両側からなされている。長さ1.7cm、頭部幅0.88cm、厚さ0.4cm、重さ1.2gを測る。石材は滑石と思われる。27は勾玉の未製品の可能性がある。表面は丁寧に研磨されている。頭部を作り出す際に欠損したものとする。石材は翡翠か。

ガラス小玉（遺物番号28～31）；4点が出土している。1号住居2点、2号住居2点の内訳である。すべて青色を呈している。いずれも直径5mm程度、厚さ3mm～5mmを測り、丸味をおびている。

1号住居から青銅器片と思われる径1cm以下の細片が出土している（30ページ写真）。

おわりに

古墳時代から古代にかけての日置平野は、北浦地方きっての豪族日置氏の勢力基盤として、この地方でもっとも繁栄した地域である。そしてこの地域性がすでに弥生時代から形成され始めたことは、今回の高畑遺跡の調査によっても明らかである。北浦地方の弥生文化については、国指定重要文化材「有柄細形銅剣」との係わりから、向津具半島の特殊性が喧伝されがちである。しかし、農業生産を基盤とした弥生文化も着実な発展をとげていたのである。北浦地方第一の広さを持つ日置平野における集落の展開が、このことを暗示している。高畑遺跡の調査は、北浦地方における弥生文化の実態とその動向を知る上で、貴重な資料を提供してくれた。

日置平野の最南端、掛淵川を見下ろす台地の上にムラが営まれたのは、弥生時代中期後半のことである。掛淵川流域の日置平野部には、弥生時代前期末に水稻耕作を主体とする弥生文化が定着したと考えられる。まず最初に営まれたのは油谷町長久である。掛淵川下流域の湿地帯を水田化し水稻耕作を定着させた長久のムラでは、しだいに生産力が向上し、それに伴う人口の増加はムラを飽和状態にさせたものと思われる。そこで新たな可耕地を求めて、分村が行われた可能性が高い。高畑のムラは、こうした動きのなかで成立したものであろう。ただし、長久のムラから直接分村された子ムラなのか、あるいは孫ムラに相当するのかはさらに検討が必要であろう。

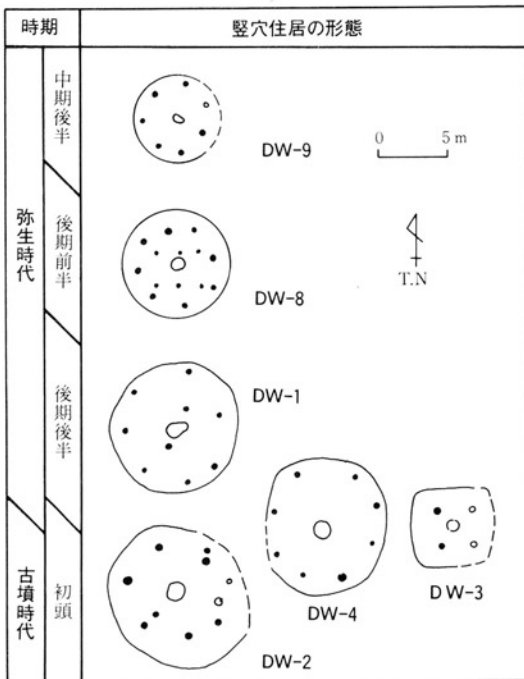
ムラは河岸段丘状の台地の縁辺に沿って南北に細長く広がっていた。その規模は最大でも南北約100m 東西約30m 面積3,000㎡程度、実際はおそらくそれ以下であろう。ムラを構成する主な施設としては、竪穴住居・高床の倉庫・農作業や畑地として利用された広い空地・ムラを他から区画する溝・排水用溝などが考えられるが、これらの配置を勘案すれば、このムラは弥生時代集落構成の基本単位である4～5軒程度の住居からなりたっていた可能性が高い。人口は20～30人くらいであろう。この時期の竪穴住居は今のところ9号住居だけがはっきりとしている。他は削平されて消滅したのであろう。

後期前半のムラの様子は不明である。この時期に属する遺構・遺物は明らかでないが、9号住居よりやや住居規模の大きい8号住居や10号住居などが相当する可能性は考えられる。

後期後半から終末期、さらに古墳時代初頭にかけては、このムラの最盛期である。現在発見されている住居の大半はこの時期に属している。竪穴住居には平面形が円形のものと方形のものがある。このうち円形住居には直径9mを越えるものが登場している。前代の住居の大きさが6m～8mであることを考えると、住居規模が大形化し、その傾向がこの

時期ピークに達したと推定できる。主柱は7～8本が壁に沿って円形に配列される多柱穴構造のものが大半を占め、中央穴を囲んで直角に配される4本柱の構造を持つものは5号住居の1軒のみである。山口県北東部にある阿東町突抜遺跡では、後期後半から多柱穴構造に代わって4本柱構造を持つ円形住居が出現し、この住居構造の変化に伴って住居の規模も直径5m内外と小形化している。中期前半から顕著となった住居の大形化は中期末～後期前半にピークを迎えている。4本柱構造とそれに伴う住居の小形化をこの時期に出現した新たな要素だと仮定すると、高畑遺跡の住居構造は、突抜遺跡のそれと比較して、やや保守的な様相を呈していると言えよう。しかし、瀬戸内地方では、防府市右田・一丁田遺跡でこの時期4本柱が一般的であるものの、平生町松尾遺跡では直径10m近い大形住居(3号住居)が検出されている。あるいは、住居構造の変化にはある程度の地域性が存在するのかもしれない。一方、方形の住居は、突抜遺跡および右田・一丁田遺跡でも確認されているように、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に出現する新たな住居形式である。

この時期に属する7軒の住居は、その切り合いから考えて、少くとも2時期以上に細分できる。比較的古い段階に属する1号住居の時期は、周溝底面出土の甕形土器(遺物番号3)の編年から、弥生時代後期後半～終末期に相当するものと考えられる。この複合口縁を持つ甕形土器は、山口県北東部の萩市大井宮の馬場遺跡や阿東町宮ヶ久保遺跡E溝新、島根県石見地方の六日市町前立山遺跡SI17や江津市波来浜遺跡B2号墳出土土器の中に類似した様相を認めることができる。山陰地方の土器編年では九重3号期～鍵尾Ⅱ式期の間に納まる



高畑遺跡の住居とその時期

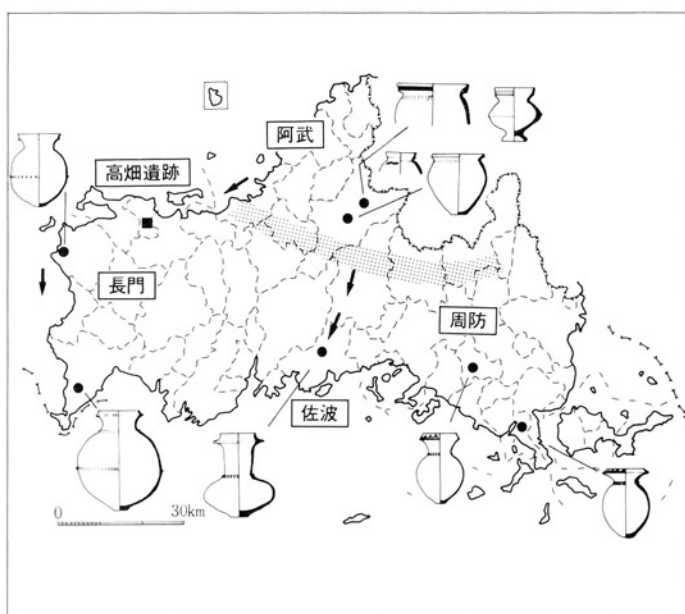
るものである。また、新しい段階に属する2号住居の時期は、埋土中出土の甕形土器(遺物番号10)の編年から、古墳時代初頭期に相当する。この甕形土器の口縁は上記の甕形土器に後出する要素を持つ山陰系の複合口縁で、その特徴から山陰地方の土器編年の知井宮期～小谷期に位置づけられる。

高畑のムラをはじめ日置平野の弥生社会はこの地域に孤立して存在していたのではない。各地域の弥生社会とは密接な交渉を持っていたのである。このことを最も端的に表しているのは遺跡から出土する遺物である。高畑遺跡の土器を検討してみよう。1号住居埋土中に発見された中期の土器(遺物番号5)は、

北部九州を中心に分布する須玖Ⅱ式系の土器であり、特に長門地方に共通してみられることであるが、この時期北部九州との何等かの交渉があったものと考えられる。ところが後期後半以降になると、先に述べたように、山陰系特に山口県北東部および島根県石見地方に分布する土器が登場している。山口県における山陰系土器の展開の仕方を見ると、おおまかに言って、日本海沿岸を西進し萩市大井、萩市小畑から下関秋根に到達するルートと、内陸部を断層谷に沿って南下し阿東町宮ヶ久保、同突抜から佐波川を下って瀬戸内沿岸の防府市右田・一丁田に到達するルートが考えられる。高畑遺跡は前者のルート上に位置し、山陰系土器の出土はちょうどその空白部を埋めるものである。このことは、この地域が前代と異なって山陰西部の弥生社会と何等かの交渉を持ったことを暗示している。また、遺物番号4の土器は瀬戸内沿岸部を中心に分布する複合口縁壺である。やはり、後期後半～終末期に属する土器であり、一方では、瀬戸内沿岸部の弥生社会とも密接な交渉を持っていたのであろう。この時期には、周防・長門の両地域で大きく分けて4つの土器分布圏が明らかとなっている。北部九州の土器と密接な関係を持つ長門分布圏（響灘沿岸部）、西部瀬戸内土器分布圏に属する佐波分布圏（防府市を中心とする地域）、同じく周防分布圏（光市島田川流域を中心とする地域）、山陰西部の土器と類似した阿武分布圏（旧阿武郡域）である。北浦地方がどの土器分布圏に属するのか、あるいは独自の分布圏を形成するのかは、今回の発掘資料では断定できない。今後検討の必要があろう。いずれにしても、この時期には周辺各地の弥生社会と様々な交渉が展開されたのである。交渉の性格は、おそらく交易など経済的なもの、婚姻関係など社会的なもの、あるいは支配従属関係を中心とする政治的なものなどが考えられよう。

石器の石材のうち黒曜石には、乳白色を呈するものと黒色のものがある。前者は大分県姫島産出のものであり、後者の産地については、分析を待たなければ断定できないが、佐賀県腰岳産の可能性が考えられる。これらの石材も周辺の弥生社会との交易を通して手に入れたものであろう。

弥生時代中期後半から引き



周辺地域の土器分布圏（弥生時代後期～終末期）

続いた高畑のムラは、古墳時代前期初頭をもって廃絶する。発掘区の東に旧河川跡が発見されている。その埋土に含まれる土器から推測すると、この川はほぼ高畑のムラの時期に存在したと考えられるが、ムラの営まれた時期に機能していたのか、あるいはそうでないのか断定することは困難である。しかし、この川は台地上を北に流れており、ムラと並行して常時機能していたと考えるのは地形の上から少し無理がある。想像をたくましくすれば、この川は、長雨が続いたある日突然に発生した山水（鉄砲水）の跡とも考えられ、この災害がムラを廃絶させた大きな原因だったのかもしれない。

その後、この地における人々の生活の痕跡は長い間跡絶えてしまう。おそらく耕地として利用されたのだろう。つぎに村が出現するのは室町時代末期～江戸時代初期である。3棟の掘立柱建物が発見されている。この時期の遺構の切り合いは認められないので、この3棟の建物は同時期かあるいは近接した時期のものであろう。建物はいずれも発掘区の西南部に位置している。1号建物はその中で一番規模の大きいものであり、住居（母家）と考えられる。2号建物は棟方向が1号と同じであり規模も小さいことから、これに付随する小屋（納屋）であった可能性が高い。3号建物の棟方向は1・2号建物とは90°異なっている。しかも2間規模の桁行方向柱間の間隔が異なっており、1・2号建物とは時期的あるいは機能的に性格の異なった建物であろう。建物群の東には庭と思われる遺構のない空間があり、その北には3段の旧耕地とみられる削平跡がある。母家と納屋それに庭と耕地、それはまさに当時の農家の典型的な景観であったに違いない。

以上、調査成果をもとに、私見と憶測を加えて、高畑遺跡の推移をたどってみた。発掘資料の整理も不十分なまま時間に追われての報告である。今後整理と検討をさらに加えて、今回残された問題を追求していきたい。

（参考文献）

- | | | |
|--------------------|---------|-----------------------------------|
| 山口県教育委員会 | 1985.3 | 『よみがえる弥生のムラ — 突抜・馬場遺跡 — 』 |
| 山口県教育委員会 | 1974.3 | 『右田・一丁田遺跡、的場・宮の馬場遺跡、久米市遺跡』 |
| 山口大学人文学部
考古学研究室 | 1984.3 | 『熊毛郡平生町松尾遺跡の調査』『西部瀬戸内における弥生文化の研究』 |
| 山本博・磯崎正彦 | 1975.12 | 『長門・大井』 大阪学院大学 |
| 島根県教育委員会 | 1980.3 | 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 |
| 江津市教育委員会 | 1973.3 | 『波来浜遺跡発掘調査報告書』 |
| 房宗寿雄 | 1984 | 『「山陰地域」における古墳形成期の様相』 島根考古学会誌第1集 |

TAKAHATA

A Report of the Excavations
at TAKAHATA Site

1986. 2

Yamaguchi Prefectural Center for Archaeological Operation

山口県埋蔵文化財調査報告書第94集

た か は た

大津郡日置町高畑遺跡発掘調査報告書

1986年2月

発行；(財)山口県教育財団

山口県教育委員会

印刷；大村印刷株式会社